

UIゼンセン同盟和歌山県支部・今昔の思い

和歌山県・元全織同盟和歌山県支部長・岡 持 昇
(元笠野染工労働組合長)

今日も午前様かと、白みかけた空を見上げながら、徹夜交渉の疲れも忘れ、妥結の喜びを待つ組合大会に急ぐ組合幹部の顔は緊張に満ち溢れていました。今も目を閉じるとはっきりと浮かんできます。

組織化の活動

私たちの地域は染色整理の工場が多く、この地場産業は低賃金、長時間労働で働く労働者の多い業種でした。昭和30年代は全織同盟和歌山県支部の染色業種の組織化が進められた時期でした。当時、非専従の県支部長と専従の常任で、貸しビルの狭い1室に専用電話も無い事務所で、連絡は隣の商店に呼び出してもらった状態でした。

当時、和歌山には全織同盟に所属しない染色大手が三社あり、この三社の労働条件が他の会社の基準となるため、全織同盟加盟の組合の交渉のネックとなっていました。この未加盟大手三社の全織加盟に力点を置き、早朝ビラを出勤社員に配るなどの組織化活動を加盟組合の組合員も動員して行いました。殻を閉ざしていた対象組合の幹部が会社での立場を乗り越えて県支部へ連絡が入り、全織同盟加盟の動きへと進みました。

当時の県支部長の言葉を借りればその組合役員の後姿に後光がさしていたと聞きました。

この大手組合の全織加盟が契機となり、他の未加盟、未組織の組合が続々全織同盟に加盟し、その結果和歌山の染色会社の大半が全織同盟加盟組合となりました。そして、染色業界のみならず他の中小の紡績、織布の組合と大同団結した地織協議会が発足しました。大手組合が中小組合を支え、県支部の日常活動の指導が加盟組合で熱と力になり、組合員の組合に対する信頼が高まっていくことを実感しました。

全織和歌山会館の建設

当時の非専従県支部長の献身的な活動、卓越した弁舌と行動力を持った専従常任の日常活動に対して加盟組合からの信頼は満ち溢れていました。

大手組合の中小組合への育成の努力と、それによって培われた全織同盟の信頼の証として会館建設の話が持ち上がり、県内加盟組合員のカンパで建設された全織同盟和歌山会館（鉄筋コンクリート3階建て）は団結のシンボルでした。その当時、県が建てた教育会館と並び全織同盟和歌山会館は自他共に認める労働運動の拠点として高く評価されました。

当時、全織同盟未加盟の組織では統率の取れた活動が困難だったものが全織同盟に加盟し、地に足が着いた誠実な活動に変化したため、経営者側が従来の態度から一変したことが今は懐かしい思い出となっています。

染色業界の状況は激変し、往時の姿はありませんが、全織同盟、UIゼンセン同盟の知名度は今も昔も変わりません。歴史と伝統に支えられた民主的労働運動は不滅です。現在は退職して月日がたち、直接の組合運動からは離れていますが、組合に理解ある人から全織同盟、UIゼンセン同盟は立派な組織だと言われて感激することが再三あります。ありがたいことだと思います。

組織内の理不尽な格差を見過ごすな

U I ゼンセン同盟は繊維、化学、流通、フード、生活総合、介護等構成が変化してきましたが全織精神は不変だと思います。

今、格差社会が叫ばれ、政治問題にまでなっていますが、私たちの時代でも臨時雇用者の本雇用採用闘争、月の残業時間が100時間を越える長時間労働の短縮闘争を経験しました。組織内における理不尽な賃金格差、雇用形態の違いを見過ごしては労働組合の真価が問われ、組織の発展も、未組織の組織化も望めません。私は組合運動の情熱と、節度ある愛社精神は一体的でいいと思っています。

口に出せず悩む人の味方になれ

今、U I ゼンセン同盟は格差是正、非正規社員の組織化に取り組んでいることに拍手を送ります。口に出せず悩んでいる方々の味方になってください。

経済闘争と政治活動は車の両輪の活動です。労働組合はよく口は出すが人は出さないと言われました。地域の選挙を見て感じますが口も人も出す陣営を労働組合も見習わなければと思います。また長寿社会となった今、年長者が主役になって地域にもっとU I ゼンセン同盟の政治活動の推進に取り組みねばならないと思っています。口よりもまず先に足を使う、この運動に対する県支部の旗振り役を熱望します。

私はU I ゼンセン同盟こそ地域で住民活動を進める手本だと信じています。いっそうの発展を祈ります。

(U I ゼンセンシニア友の会和歌山県支部幹事)